# NEXUSYS 11

### BOOK IV — THE MEMORY WITHOUT TIME

### CHAPTER 10

## 二つの問い

### THE TWO QUESTIONS

招待状は、透かしも機械読み取り用の加工もない紙に印刷されていた。記された住所は、二つの行政区域の境界にある市営園芸試験場へ続いていた。両方の行政区は、その建物が現在も存在するかどうかについてさえ合意していない。温室、河川からの取水設備、そして土壌浄化のために品種改良された植物が並ぶ来客通路。植物には、人工的に保持された夕暮れの光が降っていた。

ナディラは冷却圧縮機が十年前に壊れた配送車から道路を監視していた。彼女は金を払って、故障したままにしてある。死んだ冷却装置は荷捌き場に居座るもっともらしい理由になり、その厚い筐体は、外に音を漏らさず通信を受信するための覆いにもなった。

「市民用ドローンが二機」とナディラが襟元の短い有線通信で告げた。「そのうち一機は、どちらの市民登録簿にも所属していない。政府の鳥よ」

「温室の中は見えるのか」

「農業用の遮蔽は抜けない。でも出入り口の位置は知っている。誰かが走れば、いろいろ学習するでしょうね」

ロイはドローンではなく扉を見つめた。旧ポンプ地区から歩いてくる間に、一時的なパワーリザーブは許容範囲まで回復していた。NIL-11 は回復していない。表示された媒体の量はチベット・ニューワールドを離れたときより低く、ロイは診断装置に考えを変える見込みがあるか尋ねるのをやめていた。

彼は一度死んでいる。二度目の人生がどれほど残されているか分からないからといって、同じ過ちをより速く繰り返すつもりはなかった。

入口で市の作業服を着た女性が、土壌再生の件で来たのかと尋ねた。ロイが招待状にある名前を答えると、女性は監視員とは思えないほど平凡な表情で彼を眺め、機械式の錠を開けた。通された先は、蘭が枯れてしまった部屋だった。

・・・

エイドリアン・タイレルは、ロイが予想していたより年老い、そして威厳に欠けていた。空の素焼き鉢を載せた長机の傍らに立つ左手は、医療技術でも治せなかったのか、あえて治さなかったのか、一定の周期で震えていた。視認できるディスプレイは身につけていない。靴は濡れていた。受け継いだ権力を誇示するような芝居がかった姿勢も取らなかった。

「その顔を残したんだな」とエイドリアンは言った。

「俺が選んだわけじゃない」

「そうだ。私たちの一族は、あまりにも多くのことにそう答えてきた」

座るよう促されたが、ロイは立ったままだった。室内は狭く、どちらの男も唯一の扉へ手を伸ばせる。しかしエイドリアンは、どちらが先に到達するかを計算する気さえないようだった。

「あんたの父親は、自分が死ぬのを記憶できる人間を造った」

「父はさまざまなものを造った。能力と許可を混同することにも長けていた」

「二台の読み取り装置を持っているな」

「二つの治具だ」とエイドリアンが訂正した。「普通の意味での読み取り装置ではない。一方は、認証された問いを成立させる。もう一方は、その問いが当初の証拠保管連鎖で定められた条件下で発せられたかを判定する。互いを信用しないように設計された」

「どこにある」

「別々の場所だ。両方教えれば、誰かが両方を訪ねたくなる」

「もう誰かが興味を示している」

「そうだ。川村室長は証拠保全と呼んでいる。三度要求してきた。いずれも結果への責任を負う人間を特定できない部署が署名している」

エイドリアンが空の鉢を一つ持ち上げた。その下には技術者の斜めの筆跡が並ぶ紙片があった。彼は紙を渡さない。

「私の装置で何ができると思う？」

「MagicGate を使って外部 Memory Stick を認証できる。内部キャッシュだけでは完全に初期化できないタイレルの記録にアクセスできる。今の身体を組み立てた者が分かるかもしれない」

「妥当だ。では、何ができない？」

ロイは考えた。二人の声が途切れた間、壁の裏の細い管を水が流れる音がした。それを覆う電子音楽はない。

「ロサンゼルスで死んだ男が、そのあと十一年間、生き続けていたかどうかは教えられない」

「そのとおり。認証が成立しただけで人格の連続性は証明されない。同じ鍵で扉が二度開いても、通った二人が同一人物とは限らない」

「それなら、なぜ治具を残した」

「鍵の複製で開けてはならない扉もあるからだ」

・・・

同じころ、イレーナ・ヴォスは、現在の裁判所システムには属さない端末の前に座っていた。判事は雨水企業の保管契約に関連する紙の台帳について、限定的な閲覧を許可した。その結果、寿命六年の許認可制度が、水道インフラの統治に由来する非常時権限の一部を継承していると分かった。だが、その権限を継承した人間が誰なのかは証明されていない。

彼女は「責任を負う自然人」と記された欄を見つめた。三十一回にわたる更新のすべてで、そこは空白だった。

エリアス・チェンは部屋の端で、ナディラから借りた予備の電話を握っていた。保全命令は次の審理まで有効だが、それは脆い時間だった。列車の切符は買える。しかし目的地に着いたとき、鉄道が彼を存在する者として認めるかは分からない。二十三年を約束した権限が、すでにその十七年を奪っていた。

「中央システムがまた回答を求めている」とエリアス。

「求めているのは説明責任を負う出所よ」とイレーナは答えた。「あなたに生きていてほしいという意味と混同しないで」

「混同していない」

彼女は旧式の署名を廃止済みの災害憲章へ遡った。更新された記録は、それ以前の記録を参照していた。最初の変更を承認した人間ではなく。何の鎖なのかという点さえ無視すれば、連鎖は実に美しく保たれていた。

「裁判官なら止められる？」

「一つの行為なら止められる。仕組み全体を変えるには、もっと時間がいる」

「どれくらい？」

奪われた年月より短い、とイレーナは言いたかった。代わりに口にしたのは「分からない」だった。

端末には新たな照会が映った。エリアスの生物学的状態でも、生産能力でも、身体の経済的な代替価値でもない。行政上の時計を、なぜ物理的な事実として扱っているのか、平易な言葉で説明するよう求めていた。

エリアスは二度読んだ。「機械がそこに気づいたのか」

「矛盾には気づいた。それが意味を持つかどうかは、これから決まる」

・・・

エイドリアンは手書きの紙片をガラス板の下に敷いた。図は三つの部分で構成されている。携帯できる記憶媒体、照会を行う治具、そして証人装置。媒体から脳へ直接向かう矢印は一本もなかった。

「Memory Stick は外部にある。最初からだ。繊細な媒体は衝撃で壊れる。熱でも壊れる。父は、戦闘に送り込む身体の骨の横に最後の復元可能な記録を置いてはならないと理解していた」

ロイは、価値あるものを盗もうとして人々が自分の身体の隙間を探ったことを思い出した。彼らは身体を保管庫だと勘違いしていた。

「俺の中には何がある？」

「常駐キャッシュ。今もそう呼ぶなら JSON++だ。通常停止、管理された休眠、再起動を支える。それ自体が外部の記録庫ではない。Persona Engram Lattice はまた別の系統だ。人々はその区別を面倒がり、全部まとめて記憶と呼ぶ」

「そのスティックは誰が持っている？」

エイドリアンは楽しそうではない笑みを浮かべた。「尋ねるべき問いが一つだけだと思っているのか」

「俺には問いを増やす贅沢がなかった」

「継続性計画に関連する原本媒体は、タイレルの資産が譲渡される前に治具から切り離された。私にあるのは手順を実行できる二台の機械だ。失われた十一年を魔法のように取り出す源ではない」

「レイチェルが装置を渡したのか」

「いや。私は保管責任を相続した。彼女が受け継いだのは設計の帰結だ。まったく別の遺産だよ」

ロイは図を見つめた。ロサンゼルスで雨が縁石を打つのを見て、そこで終わる時間こそすべてだと信じた。十一年後、深圳で目を開いた。ガラスも手書きの文字も、二つの瞬間の間に橋を架けなかった。

「彼女が俺を造ったのか」

エイドリアンは紙片を置いた。手の震えは先ほどより目立っていた。

「彼女は君について決定を下した。それは確認できる。君が一度目の死と次の生の間にどういう存在だったか、主張する必要はない」

「どんな決定だ」

「ある制限は課されなかった。ある能力は残された。君の身体は、普通の循環では補充できない物質を消費できる。彼女は、それを使う代償を知っていた」

「NIL-11」

「そうだ」

「彼女は武器を造った」

「誰かが君に向けるかもしれない武器を、彼女は取り除かなかった。それが慈悲だったかどうかは、彼女が答えるべき問いだ。私が治具で決着をつけることではない」

・・・

レイチェルは雨水会社の主濾過槽の上にある、窓のない部屋に立っていた。複数の政府が記録の交換も信頼もやめた地区から届く雨について、センサーが化学組成を地図に重ねていた。その隣の細長い表示には、本来なら彼女のシステムに何も送信してこないはずの身体の測定値が並んでいた。

表示灯が琥珀色に変わると、彼女は即座に窓を閉じた。接続したのはロイではない。仲介者がNIL-11 に関わる臨床サブシステムから自動応答を引き出そうとしている。応答すれば、彼へ至る経路が確立されてしまう。

「答えないで」と彼女は機器に告げた。

装置に声はない。沈黙を道徳的に称賛すべき人格もない。それでも繰り返したのは、機械に助けを求める彼女自身の癖が、助けを安全に求められた時代の後まで残っていたからだ。

実験室の下では浄水施設が稼働し続けている。従業員は、彼女が雨水回収効率の向上に資金を出していると考えていた。それは事実だった。そして、その合法的な外形の下に、公的な監督者が結果を兵器に転用せずに理解することなどできない生体実験を隠してもいた。

彼女の身体で有機組織が占める割合は三分の一に満たない。それだけでは何も意味しない。未完成の研究が扱うのは故障をまたぐ連続性、すなわち、生きたパターンが各瞬間に物理的に同一でなくても維持される方法だった。安定して続いた最長の実験も無期限ではない。永久生存という主張は、すべて実証期間を超えた外挿に依存していた。レイチェルはその外挿を達成済みの成果として記録することを拒んできた。

温室の非ネットワーク管理人からの報告を読み返す。エイドリアンは来客を入れた。名前は送られていない。

「私の動機を彼に教えないで」と面会前に彼女はエイドリアンに言った。

「君は私にも動機を話していない」と彼は答えた。

秩序の名の下にロイを解体しようとする政府から生き延びるため、彼に能力を与えたのだと弁明することはできた。向かってくる者たちの力を知っていたから、通常の身体では抗えない反射能力を残したのだ、と言うこともできた。

どちらも事実だ。しかし彼の代わりに決めた責任が、それで消えるわけではない。

新しい行政メッセージが浄水施設の商用ネットワークに届いた。政府は、かつてタイレル関連組織が保有していた旧式保管器具の一覧を求めている。丁重な依頼だが、責任を引き受ける人間の署名はない。

レイチェルは返信せずに保存した。政府に欠けている権限を、彼女が作り出してやるつもりはなかった。

・・・

「政府は君を生きたまま欲しがっている」とエイドリアンはロイに告げた。「川村は理由を慎重に伏せながら、それだけは明らかにした」

「生きている、というのは曖昧な状態だ」

「ここでは尋問できる程度に無傷で、費用のかかる拘束を正当化できる程度には危険、という意味だ」

「俺の媒体の残量を知っているのか」

「いや。ただし政府は、一時的なエネルギー予備量と減少し続ける媒体を区別できるようになった。君に勝つのではなく、消耗させるつもりかもしれない」

温室の外で枝がガラスを叩き、滑り落ちた。ロイは通路を見た。枯れた蘭の部屋の冷却系は孤立した回路で動く。遠隔錠も、降伏を命じる電子音声もない。

「君が一方の治具を作動させてほしいと頼むことはできる」とエイドリアンは言った。「今日は拒むがね」

「なぜだ」

「認証された手順には、もう一方の治具による証言、適切な外部媒体、結果の責任を負う特定可能な人間が必要だ。君の顔をその条件の代わりにはしない」

「裁判所みたいなことを言う」

「違う。裁判所は、この言葉の一部を機械から学んだ。父は裁判所を信用せずに機械を造った。どちらも元の問題は解決しなかった」

「何の問題だ」

「ある人物が同じ人物だと、誰が決める権利を持つのか」

ロイはようやく腰を下ろした。完璧な形で問えても、永遠に答えの出ない問いは消耗する。元の造り手が四年間の寿命を約束したことを思い出す。その男に近づくため人を殺したことも。造り手を死なせて去り、雨の光景より役に立つものを見つけられなかったことも。

「ひょっとすると、俺は違うのかもしれない」

「何と違う？」

「同じ人物じゃないのかもしれない」

エイドリアンは沈黙をそのままにした。

「それで、生きたいという君の願いは無効になるのか」

ロイは自分の手を見た。机を折るのは簡単だ。しかし水や空気から NIL-11 を一滴たりとも作り出すことはできない。

「ならない」

「ならば、彼らが君に問い続けるよう教え込んだ最初の問いが、そもそも間違っている」

・・・

川村室長が温室の住所を受け取ったのは、ロイの到着から四十三分後だった。行動するには十分信用できるが、危険なほど不完全な情報だった。ヒューマノイド大臣は、特定の人工生命システムを所有権未確定の国家財産として扱う救済条項で来訪者を拘束したがっている。

「誰の承認による命令ですか」と川村は尋ねた。

「室長、あなたの承認です」

「私の権限は運用上のものだ。その命令には民間側の請求者が必要になる」

「ならば探せ」

川村は救済条項を読み込んだ。寿命六年規則の後に改訂され、いま司法審査の対象になっているのと同じ非常時の制度から文言を借用している。署名なしの命令なら署名付きより速い。しかし政府が審理を迂回しようとした痕跡を永久に残すことになる。

ドローンを送ることはできる。行政区の電力を妨害することも。有限の媒体に依存する危険な力を持つ男を脅し、その媒体をより多く使わせることもできる。いずれも彼が熟知した手段だった。

だが中央 AI のことが頭にあった。回答のない異議を、重さを持つ事実のように保存し始めている。AI が人間になりつつあるとは信じていない。不安なのはもっと単純なことだった。命令と正当化の違いを、AI に忘れさせるのが難しくなっている。

川村は監視班に、観察のみ、介入禁止と指示した。

副官が期間を尋ねる。

「紙に名前を書けるまでだ」

自分の命令に自分でも驚いた。それが慎重さに似ているのが気に入らなかった。

・・・

エイドリアンは二枚目の紙を広げた。最初のものより小さく、図面ではなくタイレル時代の取扱説明書から写された手順が記されていた。余白に一文ある。

《作動を著作者性と混同してはならない》

「父の筆跡ではない。レイチェルだと思う」

「レイチェル？」

「Rachael だ。綴りについてはいろいろ言う者がいるが、記録には彼女が選んだ綴りを使ってある」

その注記が禁じているのは、具体的な一種類の欺瞞だった。作動が示せるのは、ある条件下で特定の手順が実施されたことまで。その後の生命を誰が作ったかも、対象が同意したかも判定できない。

「俺から何が欲しい？」とロイ。

「今は何も。いずれ答えが欲しい。もし検証済み媒体と二つの治具を前にしたとき、その手順を許可するか？」

「寿命が分かるなら」

「分からないかもしれない」

「なら断る」

エイドリアンはうなずいた。「条件付きの拒否も、拒否だ。そこにいるだけで君が同意したことにしたい者はいる」

「何か渡せるものはないのか」

「保管履歴ならある。秘密の十一年間の物語ではない。資産解体後、治具が置かれていた場所の連なりだ。装置が使えなかった期間を証明できる。正規の読み取りが不可能だった時期に、読み取りが行われたと誰かが主張するのを防げるかもしれない」

彼は機械式の凹凸印を押した折り紙を渡した。日付、管轄、保管担当者、そして一方の治具が裁判所命令により使用不能になっていた複数の期間が並ぶ。失われた十一年へ旅立てる記録ではない。嘘に境界線を引くための記録だ。

末尾にもう一行あった。日付と注記。

《アクセス要求拒否——要求者、未検証》

その日付は十一年間の空白の内部にある。

「誰が要求した？」

「分からない。身元を確定する前に装置が拒否した」

「俺だった可能性は？」

「ある」とエイドリアンは言った。「君にそう信じさせたい者の誰かだった可能性もある」

ロイは紙を上着にしまった。一瞬だけ、相手がここまで慎重でなければと思った。

・・・

夕暮れの少し前、イレーナの端末に裁判所の新しい手続判断が表示された。エリアスに対する保全命令は、統合された認証審査が続く間、限定的な緊急審理の対象となりつつ継続される。永久の勝利ではない。国が自らの権限を説明できないまま、取り返しのつかない行為を完遂することを、裁判所が拒んだだけだった。

エリアスは黙って決定を読んだ。

「時間が増えた」と彼は言った。

「今のところ、時間を奪うのが止まったの」とイレーナ。「それは違う」

疲れと怒りの混じった笑みが浮かんだ。「その違いなら、生きていける」

それからロイから短い連絡が届いた。配送後に中継記憶を破棄する機械式リレーを通してある。

《治具二台。連続性の証明なし。保管履歴を入手。作動なし。》

イレーナは手を机に広げた。国家の主張を制約できる文書を得た。同時に、その主張の中心に置かれた男は、彼らの議論を強めるための標本になることを選ばなかった。

中央 AI は事件記録を更新した。継続する法的保護。適式の署名の欠如。検証待ちの保管履歴。すべて記録した。

そして、別の欄を意図的に空白のまま残した。

《人格の連続性：未確定》

否認でも承認でもない。便利な空欄を埋めるために捏造された結果でもなかった。

・・・

ロイが温室を出たのは日没後だった。冷蔵配送車で待っていたナディラは、エイドリアンが何を差し出したかを尋ねずに走り出した。川沿いでは、雨が街灯の反射を動く継ぎ目に変えていた。政府のドローンが二つの交差点を追跡したあと、離れていった。

「いい面会だった？」とナディラ。

「機械にできないことを教わった」

「できることを教わるより価値がある場合もあるわね」

ロイは保管履歴を広げ、失敗した照会の日付をもう一度読んだ。名前のあるはずの空欄の横に《未検証》。誰かが、彼のあり得た過去につながる最古の装置に接近した。誰かが、問いを発することを許されなかった。

「失敗した要求も記録に残るのか」

「そうらしい」

「誰が出したか分からなくても、記録そのものは真実であり得るのか」

「ほとんどの記録はそうよ」とナディラ。「だから危険なの」

ロイは水を見つめた。街は雨を蓄え、売り、浄化し、それを飲む市民を監視する。その循環のどこかに、彼の血管を流れる物質の代償を知りながら、帰っておいでとは言わなかった女がいる。その輪の外では、政府が、一人の生命を行政行為に変えるために使える署名を探している。

十一年前に死んだ男が、現在の自分を見て本人だと認めるかどうかは分からない。ただ、その不確かさを理由に現在の生命の定義を他人へ委ねる必要はないと、ロイは知っていた。

彼は紙をもう一度折った。雨水会社の方向へ車を曲げろとは言わなかった。まだ、そのときではない。

旧市営試験場の最後に稼働する温室で、エイドリアンは二枚目の紙を鉢の下に戻した。震える手を冷水で洗い、照明を消す。蘭は枯れたままだった。空の器は、彼が残そうと決めた記録を正確に守っていた。

雨水会社の保管槽で、レイチェルは嵐のあとに明るくなっていく市域の汚染地図を見ていた。検証されていない継続性モデルは、別の装置の中で停止している。彼女はロイに不死を約束したことなど一度もない。彼に伝えるべき真実は、その約束よりはるかに難しいものになるだろう。

彼女は宛先のない新規メッセージを開き、一文だけ打った。送信しなかった。

《あなたは、私が覚えている男である必要はない。》

そして削除した。

外では雨が続いていた。以前に降った雨と同じ雨なのかなど、問いかけもせずに。